

[論 文]

「ideal Fit」展の全容

—美術教育としての展覧会とアートマネージメント—

The Whole Picture of the Exhibition ‘ideal Fit’

—Exhibition as Art Education and Art Management—

於 保 政 昭

Oho Masaaki

次代を取巻く環境は、芸術と言うある種異質な空間環境にも実態と実績を要求する現実を突きつけられている。時代によってその思考すら大きく変容する価値観に対応すべく、大学という研究教育機関がある種の方向性を提示することを課題とし、制作の発表を实践する機会を模索していた。2012年10月6日～10月14日に大分県別府市 高橋記念館 聴潮閣において美術科で取り組むアートイベントを実施した。この展覧会のプロデュースにあたって幾つかの着目点を念頭に実施を進めた。芸術作品を発表することは勿論のこと、広報活動、外部折衝等アートマネージメントに関連する取組を並行し、美術を選択する学生にとっても、一連の活動を体験させることにした。そこには現代において表現者が取り組むべき活動が制作だけではなく、セルフプロデュースする力を必要としている時代であることを念頭に教育課題とした。また、制作にあたっては日頃取組まない特殊な空間での表現から様々な技法や展示法を指導し、いままでにない制作スタイルを实践することになったそのレポートを記録したい。

【作家の制作に関するレポート】

出品作家：田中愛理（短大2年）／高本佳奈、東郷美佳、大畑大貴（専攻科1年）

■田中愛理 Discharge of spirit生気の排出/spiritの痕跡を認識するためのドローイング

Breath, balloon in acrylic box/Acrylic, water marker on paper

昨年のベップアートマンスに風船を使った作品を発表しており、通常制作スタイルもインスタレーションを意識した作品とドローイング制作をスタイルとしていた。今回は庭に置かれた集積装置に息という痕跡を封じ込めた風船を集め他者とのコミュニティを表現した。封印する形態と集積の機能には作家のポリシーを優先させた。そのアイデアをドローイング化することで、現実と思考の対話として表現された。



■ 高本佳奈 peep pinhole

Embossing lead in plate, corrosion, pinhole/Silkscreen, on acrylic board/frame

人物を対象とした油彩タブロー作品を主に制作している。平面を意識した制作スタイルから建築の障子部分に光と影の陰影を取り入れた造形コンセプトを展開。覗く行為と他者との隔たりをテーマとした作品から、鉛に目のモチーフをエンボスし重圧な陰影と隔たりを表現した。また見えるようで見えない普段意識しない隔たりを、透明な支持体に砂や塵を付着させた壁から覗かせることで、現代社会の心象を見せた。

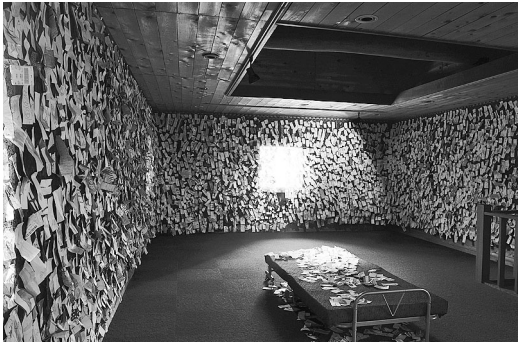




■東郷美佳 扱った記録

Pen, colored pencil, watercolor, and thread on receipt/Mixed media

漫画・アニメーションからインスパイアされたキャラクターに自身の心象を投影させたイメージスタイルを持つ。即興的なドローイングが印象的であったこととドロースケールが実は小さいことに着目し、レシートと言うスケールに描写する。簡単に消費される物とその裏側にある記録とキャラクターに乗せた心象がリンクする作品となった。1万余のレシートを自身の内蔵と意味する赤い部屋に張り巡らせ、体内と心象の交える空間を体感させた。



■大畑大貴 【Fake<1】複製された真実の愛よりもたった一つの偽りの結婚

Silkscreen on aluminumboard/Drypoint, fingerprint, corrosion, hangingscroll

床に埋め尽くした金属のプレートを踏みしめることで、結婚という制度に対するテーゼを表現した作風となった。光を反射させる金属プレートにシルクルリーンで印刷された婚姻届に自身の名と架空の婚姻者の名が刻まれている。床の間に掛けられた軸には本物を仮定した婚姻届が展示された。制度に対して「よがる」視点を踏み傷つけて行く体感と軸の円相に込める「恩愛」を対比させた表現が展開された。



【デザインツールに関するレポート】

広報ツールデザインはビジュアルデザインの学生を中心に企画を進めた。ロゴマークデザインは中尾良多が担当した。イメージはレトロ・モダンである。Fitの“i”の部分を出品作家の手描きによるイメージを重ねたデザインになっている。パンフレットデザイン・レイアウトは川野史織が担当した。デザインと撮影の監修には講師（西口顕一、於保政昭）が担当することとなった。このパンフレットには記録と広報の機能を持たすことから、会期前から作家のコンセプトテキスト準備とともに、展覧会に向けてのコメントを大分市美術館 館長菅章氏に依頼し文章を綴って頂いた。メディア掲載は西日本新聞、大分合同新聞、大分ケーブルテレコム、OBS大分放送、インターネット上ではFacebookページ (<http://www.facebook.com/idealfit2012>) を立ちあげ、パンフレットの配布場所の案内や制作ドキュメントの情報を掲載、美術関係者のコメントMovieを掲載した広報展開を実施した。パンフレットの制作の他に映像記録の制作も会期終了後から行った。ドキュメント映像の撮影は美術専攻大畑大貴が担当し、編集及び監修は本学准教授鈴木慎一

が担当した。

会場各所に配置したサインデザインは宮原莉紗が担当。交流会のパーティーイメージには「菊屋」による和菓子をコラボレートし歓談された。



広告ツールから会場のサイン等に及ぶコーディネートデザインを組み合わせ展開したことは、美術科にとっても大きな試みであった。アートとデザインの力を存分に発揮する機会となり、各専攻の学生間の交流を深めることとなった。

【芸術文化に関するレポート】

本展覧会のもう一つの狙いは本学が美術のみならず、芸術文化の特色を見せることを含んでいた。現代に即応した美術作品展と共に、その空間に共存する文化意識の交流を実現した。実施したイベントはお茶会、演奏会、トークイベントと交流会を行った。「Tea&Co.～茶道部と美術科学生によるコラボレーション」と題したお茶会には円相を題材にした軸をテーマに展開され、「陰影礼賛」を感じさせる空間で、本学で陶芸を学ぶ学生の茶器で行われた。英語によるスピーチも行われ国際文化の情景を感じさせた。「芸短弦楽アンサンブル演奏会」ではブラームスの弦楽六重奏曲 第1番を主に大畑大貴のプレート作品上で演奏され、重厚ある響きが陰影豊かな叙情性を表現し、特殊な環境に響きあった形を見ることができた。「トークイベント&交流会」には本学准教授荻野哉と出品作家とのディスカッショントーク「地方・大分の美大セイVS美学のスペシャリスト！」と題し行われた。多くの聴講者のなかアート作品を制作していく若い世代へのメッセージなどを語り、次代の表現者にとって有意義な内容となった。

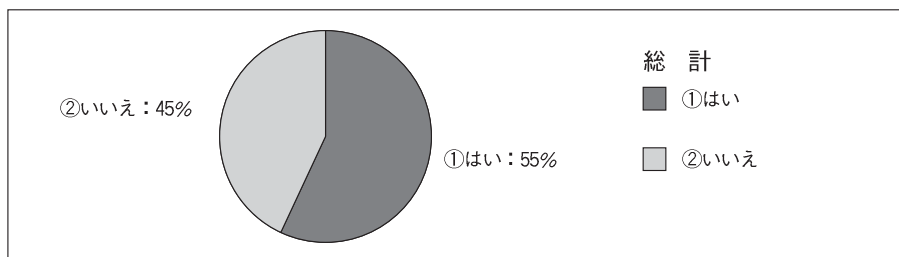


【アンケート結果】

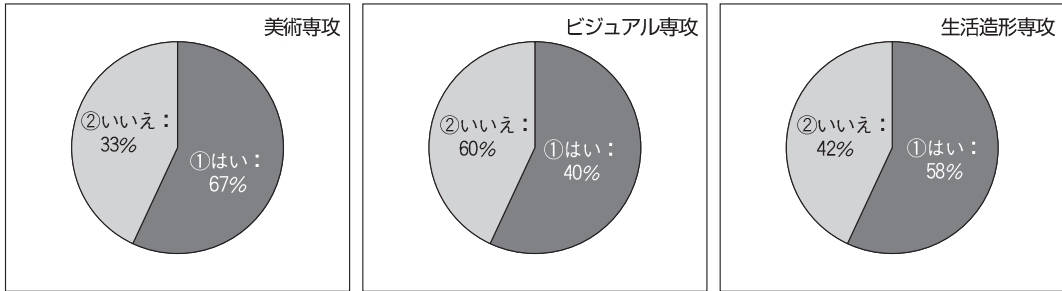
本展覧会終了後に出品者の申し出により、在学生の意識のあり方と今後の発表のスタイルの調査を含めたアンケートを実施した。学生自身が設問項目を盛りこんだ点と美術科全域に渡った調査をすることとした。

美術科企画展 ideal Fit (10/6－10/14) を観にいきましたか？ (複数回答可)

	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総 計	備 考
①はい	32	19	28	79	
②いいえ	16	29	20	65	
合計	48	48	48	144	

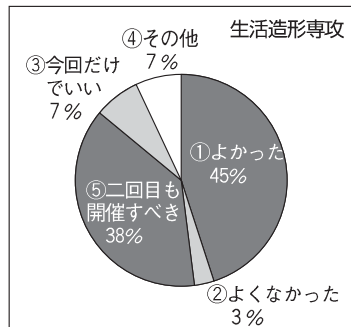
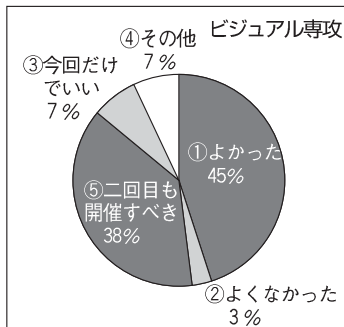
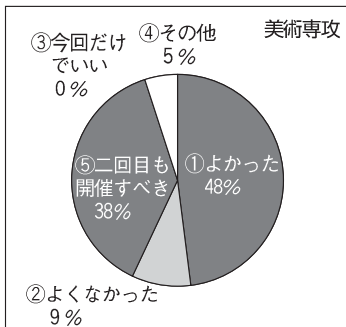
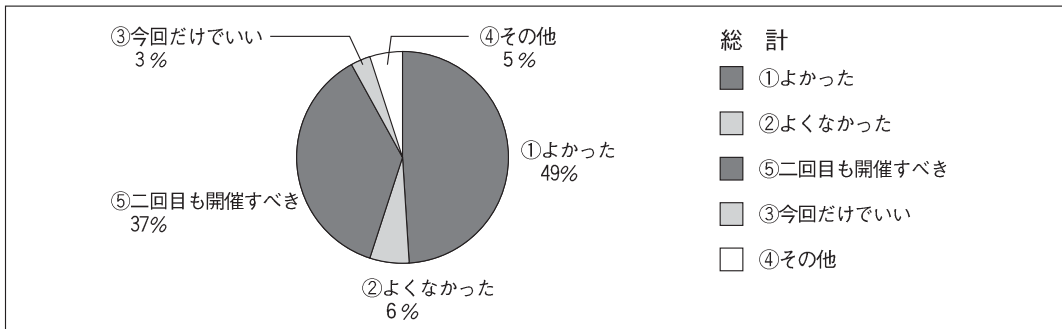


「ideal Fit」展の全容



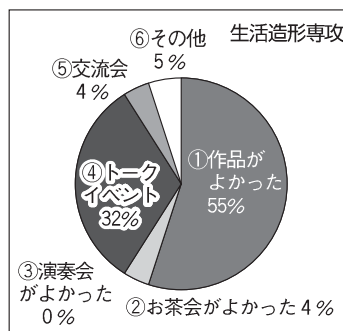
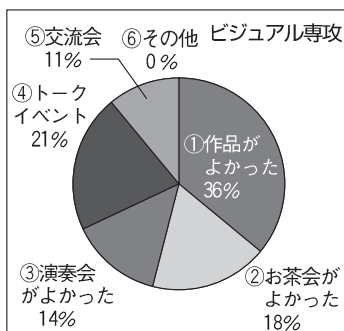
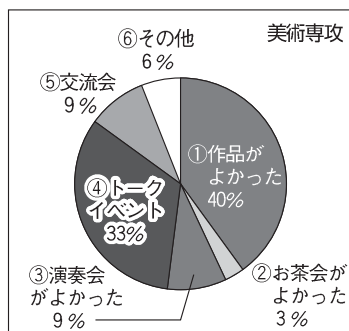
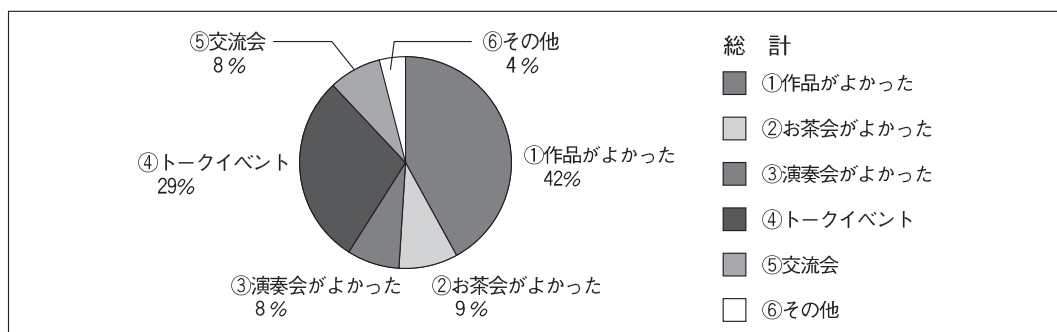
※ 「はい」と答えた方

	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①よかった	20	13	20	53	〈美〉来年も続けてほしい。芸短の未来の明るさに感動した。
②よくなかった	4	1	2	7	
⑤二回目も開催すべき	16	11	13	40	
③今回だけでいい	0	2	1	3	
④その他	2	2	2	6	〈ビ〉良くもあったし悪くもあった。一部とてもよかった。 〈生〉良かった面もあるし、よく分からないところもあった。 〈美〉勉強になった。
合計	42	29	38	109	



※「よかった」と答えた方：どの催しが良かったですか？

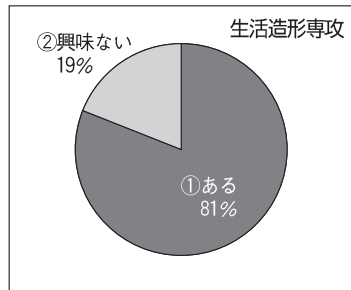
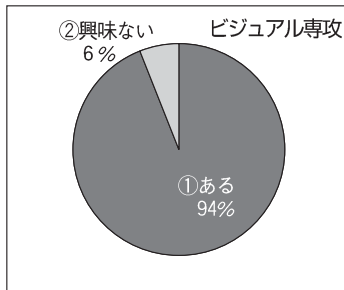
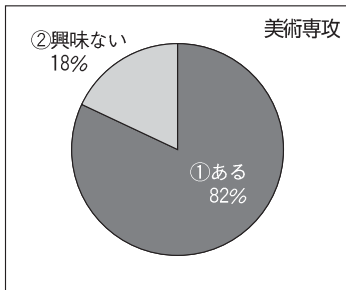
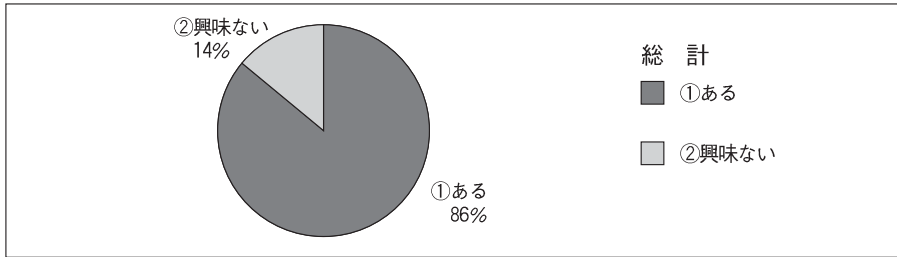
	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①作品がよかった	13	10	12	35	〈美〉それぞれの部屋で独特の空間をもっていて面白かった。 〈ビ〉すべて
②お茶会がよかった	1	5	1	7	
③演奏会がよかった	3	4	0	7	
④トークイベント	11	6	7	24	〈ビ〉もっと学生と先生が意見をかわすディベート的要素があると思った。
⑤交流会	3	3	1	7	
⑥その他	2	0	1	3	〈ビ〉環境、建物 〈生〉和菓子
合計	33	28	22	83	



今回のような展覧会に興味はありますか？

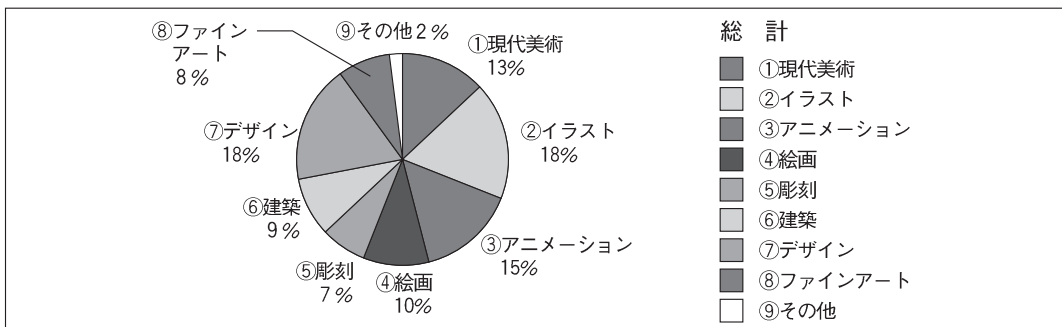
	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①ある	37	46	39	122	
②興味ない	8	3	9	20	
合計	45	49	48	142	

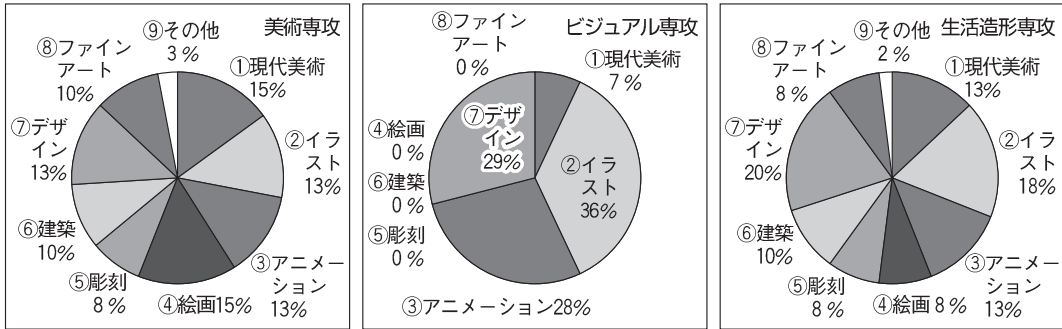
「ideal Fit」展の全容



ないと答えた方：どのような展覧会を鑑賞したいですか？（複数回答可）

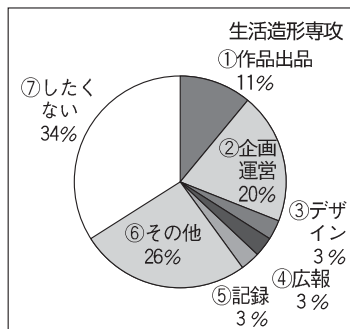
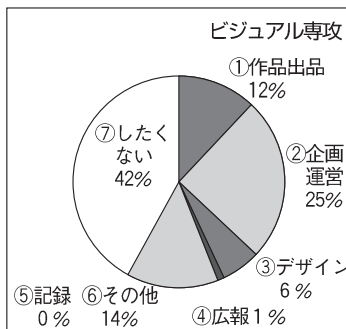
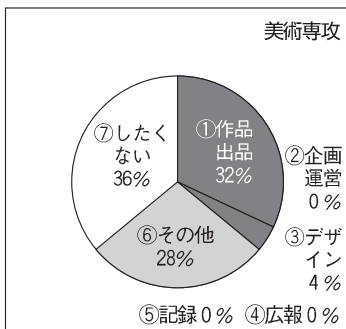
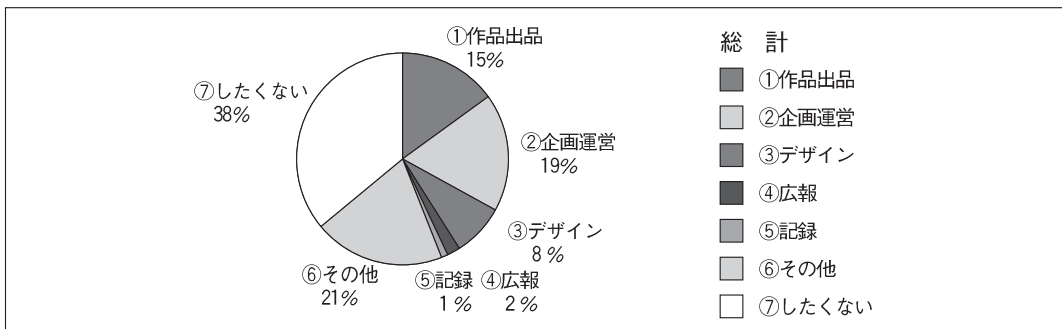
	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①現代美術	6	1	5	12	
②イラスト	5	5	7	17	
③アニメーション	5	4	5	14	
④絵画	6	0	3	9	
⑤彫刻	3	0	3	6	
⑥建築	4	0	4	8	
⑦デザイン	5	4	8	17	
⑧ファインアート	4	0	3	7	
⑨その他	1	0	1	2	〈美〉人形 〈生〉版画
合計	39	14	39	92	





学内の企画展(学内ギャラリー、専攻科展、ideal Fitなど)に作品出品、あるいは運営に携わりたいと思いますか？

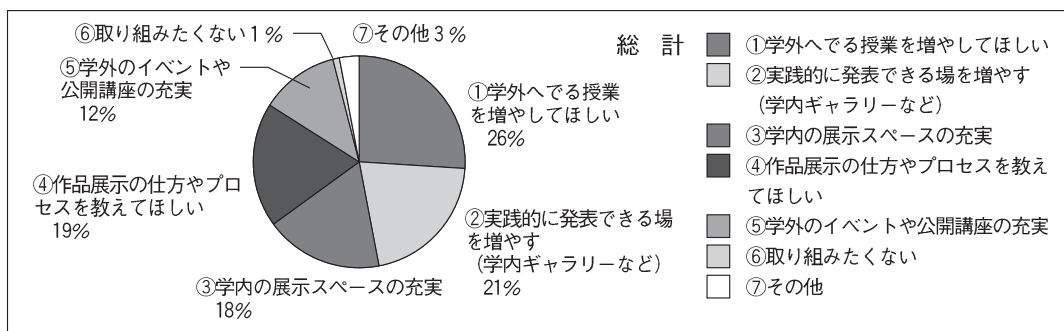
	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①作品出品	8	9	7	24	(美)しなきゃいけないのでは？それが成績の評価にもつながるのでは？
②企画運営	0	18	12	30	
③デザイン	1	4	2	7	
④広報	0	1	2	3	
⑤記録	0	0	2	2	
⑥その他	7	10	16	33	
⑦したくない	9	31	21	61	(美)わからない (生)搬出、どちらでもない。
合計	25	73	62	160	



この展覧会を通じて、作品やトークイベントに興味を示した点から、多くの学生が発表の意欲を持ち、活動の場を考えていることが見受けられる。また、興味のある展覧会に関しては美術専攻と生活造形はほぼ一致するところであった。全体的に人気はあったものの、特にビジュアルはイラストやアニメーションで過半数を超え、従来のアカデミックな体制ではニーズを網羅し難いことも反映されているように感じた。また、学生自身が企画運営に携わることには消極的であることも懸念される点ではあるが、今後の課題として受け止めたい。

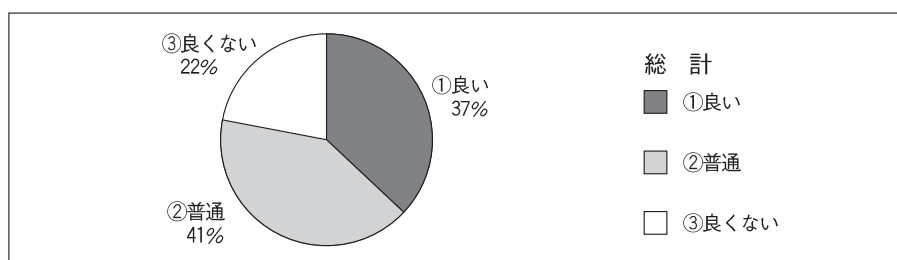
自分の在籍する科で、対外的活動に関して取り組むべき要望はありますか？

	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①学外へでの授業を増やしてほしい	16	21	21	58	
②実践的に発表できる場を増やす(学内ギャラリーなど)	18	13	16	47	
③学内の展示スペースの充実	18	12	10	40	
④作品展示の仕方やプロセスを教えてほしい	13	13	18	44	
⑤学外のイベントや公開講座の充実	3	14	10	27	
⑥取り組みたくない	2	1	0	3	
⑦その他	2	2	2	6	〈美〉何かやりたいことを言えば先生方は出来る限り協力して下さるので十分。 〈ビ〉ギャラリーに使えるような照明の貸し出し、企業連携。 〈生〉知識と技術を増やしたい。
合計	72	76	77	225	



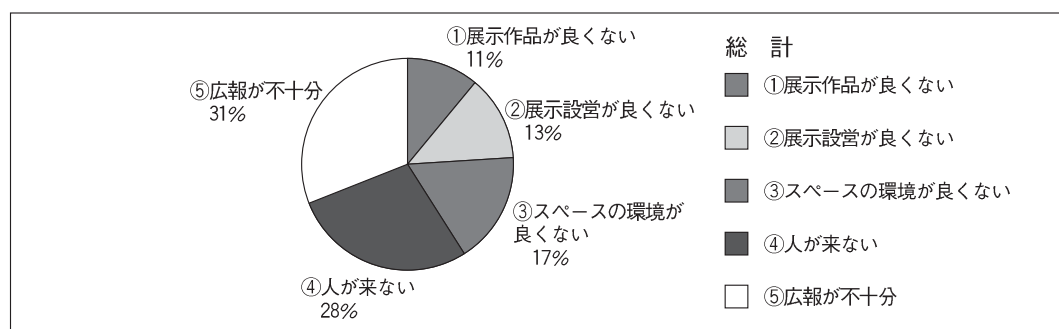
学内ギャラリーについてどう思いますか？

	美 術 専 攻	ビジュ アル専攻	生活造 形専攻	総 計	備 考
①良い	19	7	27	53	
②普通	20	21	17	58	〈美〉展示する人のやり方でよくも悪くもなる。
③良くない	3	22	6	31	
合計	42	50	50	142	

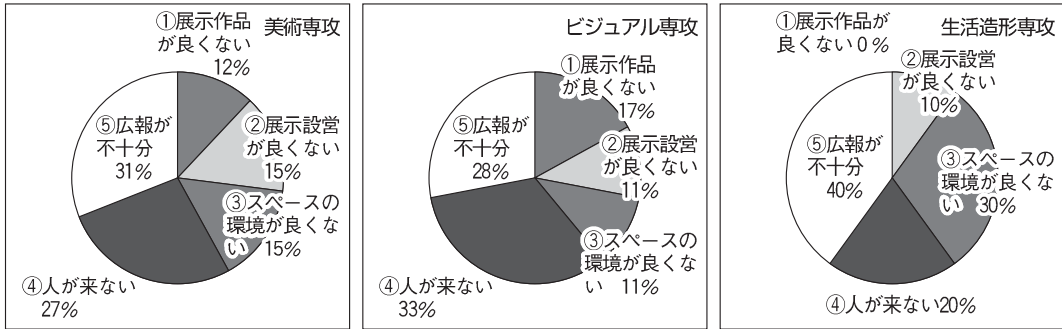


※「良くない」と答えた方

	美 術 専 攻	ビジュ アル専攻	生活造 形専攻	総 計	備 考
①展示作品が良くない	3	3	0	6	〈ビ〉いいものと悪いものの差がある。
②展示設営が良くない	4	2	1	7	
③スペースの環境が良くない	4	2	3	9	
④人が来ない	7	6	2	15	〈生〉美術だけは？
⑤広報が不十分	8	5	4	17	
合計	26	18	10	54	



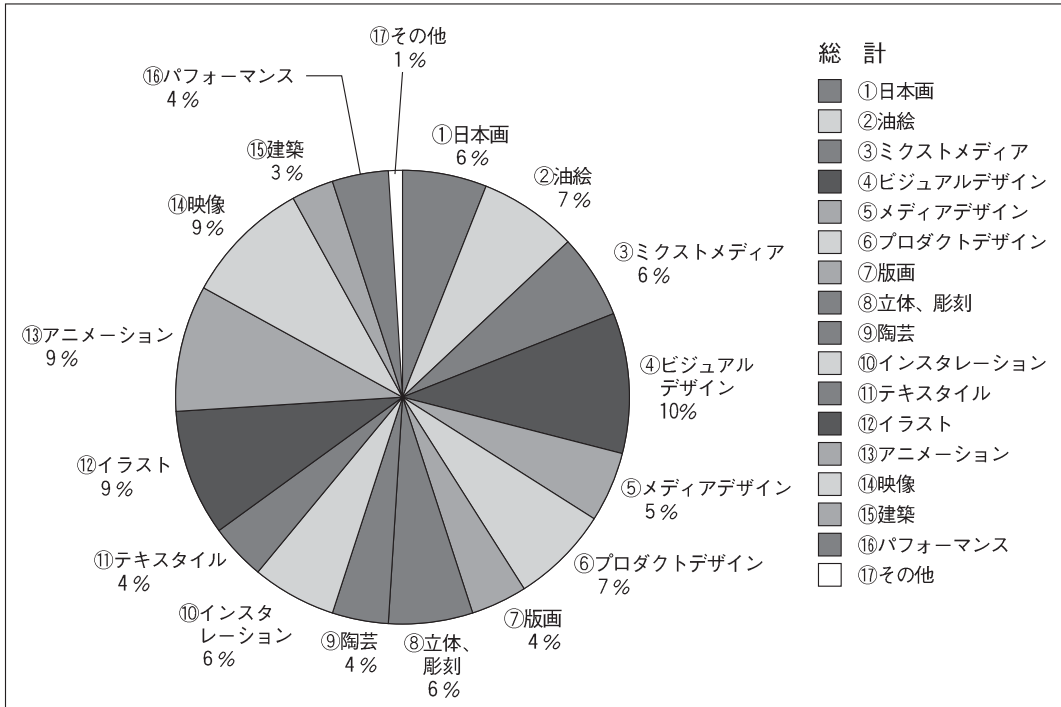
「ideal Fit」展の全容



デザイン専攻の学生には対外的な活動の重要性を意識する傾向が強く見られた。美術専攻では自身の作品の発表に関することに意識が高い。学内ギャラリーの状況に関しては気軽に利用できる反面、対外的な運営が行われていないのが現状と捉えている。特に展示に対する意識指導や広報活動を充実させる必要性を感じていて、「良くない」の回答状況からその問題点が見受けられる。今後は展示の方法や広報活動を併せての教育的な指導と、本学にとって広報の一環としてギャラリー機能を充実させることが必要と思われる。

興味のあるジャンルは何ですか？

	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①日本画	21	10	9	40	
②油絵	29	8	9	46	
③ミクストメディア	28	7	6	41	
④ビジュアルデザイン	10	41	17	68	
⑤メディアデザイン	7	18	6	31	
⑥プロダクトデザイン	7	18	23	48	
⑦版画	8	6	11	25	
⑧立体、彫刻	20	9	13	42	
⑨陶芸	16	7	6	29	
⑩インスタレーション	14	12	12	38	
⑪テキスタイル	1	9	15	25	
⑫イラスト	16	29	18	63	
⑬アニメーション	13	30	18	61	
⑭映像	17	26	15	58	
⑮建築	5	6	10	21	
⑯パフォーマンス	9	8	11	28	
⑰その他	2	2	1	5	〈美〉漫画、写真 〈ビ〉空間造形
合計	223	246	200	669	

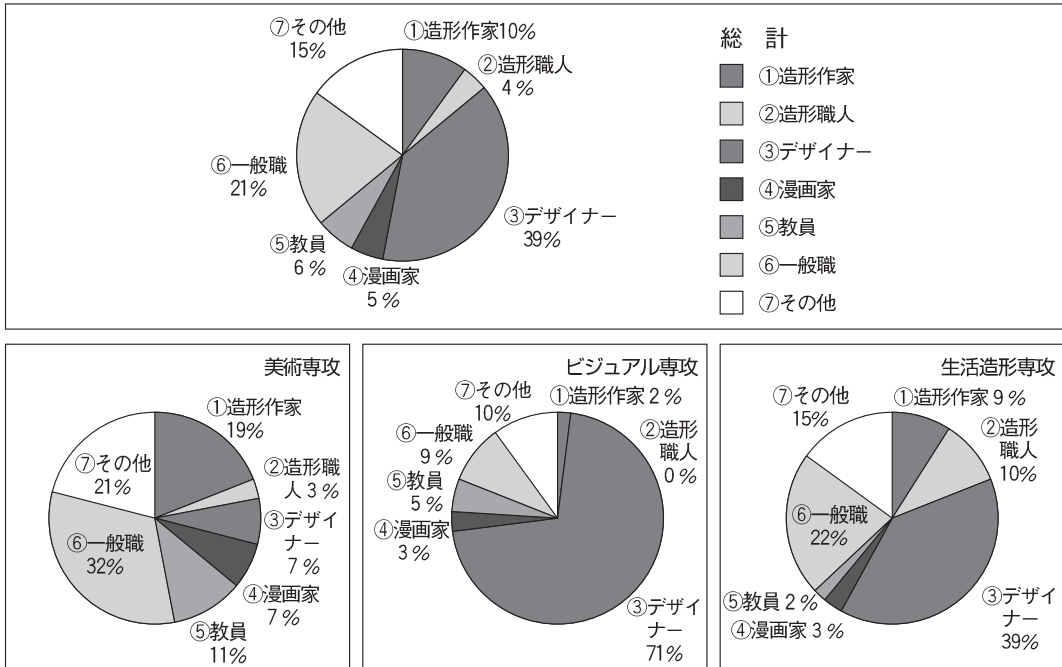


興味のあるジャンルに関して、全体的な平均を見るとほぼ横並びであることがわかった。本学の傾向として広く学びながら将来の選択肢を模索している可能性があるかと思われる。次の卒業後の目標では美術専攻では約半数が一般職やその他を選択している。デザイン専攻ではデザイナー志望が大半で生活造形の一部にも一般職が見受けられた。特に美術専攻では作品の対外的な発表は非常に重要な点から、芸術家を目指す過程と発表のスタイルを指導することで、より目指すべき方向性を検討できるのではないかと考えられる。

卒業後の目標は何ですか？

	美術専攻	ビジュアル専攻	生活造形専攻	総計	備考
①造形作家	11	1	5	17	〈美〉画家、美術家
②造形職人	2	0	6	8	
③デザイナー	4	41	23	68	
④漫画家	4	2	2	8	
⑤教員	6	3	1	10	
⑥一般職	18	5	13	36	
⑦その他	12	6	9	27	〈ビ〉フリーランス、イラストレーター (生)まだ未定、企業、雑誌編集者、デザイン補佐、美術に関わること。
合計	57	58	59	174	

「ideal Fit」展の全容



【総評】

今回のプロジェクトを通じて本学の美術科の取り組みの一つとして、ある種エポック的な要素を実現できたのではないかと感じている。この「idea Fit」ではアートマネジメントを指導の中に組み込んだ。教育機関の中でアート分野とデザイン分野が、それぞれの能力を活かした点が大きく関わったことは垣根を超えた発展を見ることができた。これは制作を行う教育とは違う視点を学ぶことに繋がり、デザインの分野にとっても広報的な要素を強く意識するプロジェクトリテラシーを目標とすることで、今後の企画運営スタイルを確立するきっかけとなることになった。アートプロジェクトの評価はその場所でそのプロジェクトで「新しい」物語を生んだかどうか、その場所に存在しなかった価値観が生まれたということが一つの達成であると考え。過去に対するアンチテーゼまでとはいかないまでも、ここに新たな文脈とデータの記録を残せたことが、アートプロジェクトリテラシーを設けるきっかけとなり、本学が芸術の研究教育機関としての役割を担い、未来の芸術文化発展に寄与することを期待したい。

企画・編集 於保政昭

デザイン 川野史織

撮影 川野史織 於保政昭 西口顕一

広報 中尾良多

会場ツール 宮原莉沙 中尾良多

協力 高橋鸽子 菅章 久保木真人 荻野哉 川瀬麻由美 永田道弘

展覧会事務局 野村菜美

映像記録 鈴木慎一

デザイン監修 西口顕一

協賛 株式会社 大宣

後援 朝日新聞社 読売新聞西部本社 NHK大分放送局 OAB大分朝日放送
OCTケーブルテレコム